

夕刊 新報 昭和八年二月十一日 第三千六百四十八號

鳥小屋

鈴木光

夕暮は一面に鉛を流した
様に凝んで、時折東の方か
ら生温い風が頬を撫で、去
つて行く、赤井嶽のスカイ
ラインに青色の空が愛嬌
に雲間から顔を出した...

新歌壇

小山田 滋選

老ひ父に
食しきは悲しきものよ老ひ父の、なほ働か
せぬと術なし
六拾路越えて働かぬ父を思ふ時、我が働きの足
らざるを悲しむ

潮聲初句會

於木鬼莊

穴藏に納豆つくる山家哉
納豆を食ふてへたつく口洗ふ
故郷の自慢の納豆着きにけり
思ひ出の納豆汁を造りけり
納豆を食ふる兒の聲を甲高し
納豆を好む兒に思ふかな
納豆を食ふ兒に思ふかな

磐城短歌會

二月十一日 午前正十時

一、場所 マルトモホール
二、會費 金二十錢(晝食代)
三、趣意 三浦管内、當日朝會へ御持参
願ひ度し

主 催 磐城新聞社

暗い燈明が點る。墨痕やかな手付きで酒樽を酌
鮮かな(?)「賽銭箱」の紙がむき。等々圍爐裏の周囲
小夜風に戦いで居る。
小夜風に戦いで居る。
小夜風に戦いで居る。
小夜風に戦いで居る。

吉田眼科病院
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。

吉田眼科病院
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。
乙女の心を傷ましむ。

拈華微笑
第一家庭に閉居
たる大國旗の威
威、あす建國祭
祝の出来事
學校問題で區民
大會の大衆生産
團爐裏で唯ひこまで覗
む農村の兄らちやん達か
奇半分に押し掛けて来るか
と思へば白粉臭い娘つ子達
もキヤツキとささめき
がら。

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

付む男
秋露の流れる初春の
背を、路傍の一樹に
凭れてゐる男！
戀愛の手たりし此の
男も破綻と悲哀の二
重奏に今はたゞ、傍
過去を夢を描いてゐる
の...そして又何
を求め様と今深い悩みに
悶えて居るのだらう？
春の芽生へと秋の凋落
とより知らぬ幸多き
路傍の一樹よ！
汝の幸を願つて今沈み
行く此の男の魂を救
ひあれよ。

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

お蘭陀お蝶
渡邊歌作
布施長春書
「延喜でもねわ、歌目吐か
つしやるな、お蝶どのや孫
でも、おん出たら見せに連
れて来い」
「はい、有難うございま
す。最上はお別れかいなア
！」

白馬の雪營業所
長の本家 松本 徳一
電話(二八五)本營業所

優等賞入選
白馬の雪營業所

漆器を!!!
専門の(共)は誠實勉強
御贈答に!!!

共漆器店
各器漆器
専門卸小賣

鈴木醫院
耳鼻咽喉科専門
日本歯科長醫學士 鈴木 喜政

高久病院
内科 外科 小兒科
新醫學士 高久 孝

高久病院
内科 外科 小兒科
新醫學士 高久 孝

夜
科 内 二十
病虫腸指
専門
院醫科村松
(番七〇一電町南町平)

江 前 戸
當店に於て自慢の
大蒲焼
壽司 烹 開業以來

十日
体温計の検査日です
お宅の体温計は?

共濟病院案内
院長 醫學博士 石山 謙 郎

生花教授
池ノ坊流 生花を懇切丁寧に御教授いたし
ます。お遊びながら御出で下さい。

生花教授
池ノ坊流 生花を懇切丁寧に御教授いたし
ます。お遊びながら御出で下さい。

生花教授
池ノ坊流 生花を懇切丁寧に御教授いたし
ます。お遊びながら御出で下さい。

